

# 特別支援教育を推進するための校内支援体制の構築

南国市立大篠小学校 教諭 片岡和香

## 1 はじめに

平成19年度、特別支援教育がスタートした。4月1日付けの文部科学省初等中等教育局長からの通知には、特別支援教育は「共生社会の形成の基礎」であり、「特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるもの」と明言されている。そして、「校長のリーダーシップ」の下、体制整備等を行い、「組織として機能」することの重要性を述べている。

各学校では、これまでに特別支援教育学校コーディネーターの指名や校内委員会の設置など校内体制づくりが進められ、特別支援教育推進の骨格が整ってきた。次のステップは、それらに筋肉をつけ神経を通わせ、学校全体を「組織として機能」させていくことである。

本研究では、小学校の通常学級担任の学級経営支援にポイントを置いて校内支援体制を考えた。通常の学級では、生徒指導上の問題や学習面の課題など障害の有無にかかわらず、個に応じた配慮や支援を要する児童が数多くいる。担任は、これらの子どもたちへの対応を工夫しているのだが、うまく行かず苦慮している現実もある。また、学級が集団として機能しないという学級経営上の課題で苦悩している場合もある。学級経営は、担任一人で行うものではなく、校内委員会と連携して取り組んでいくものであるが、子どもの生活の基盤となる学級集団づくりのキーパーソンとしての担任の役割は大きい。また、支援の必要な子どもたちを学校全体で支えるための人的・物的環境づくりも必要である。そこで、学校全体が「組織として機能」するためのキーワードとして、「子どもたちが安心して過ごせる学級づくりのための学級担任支援」、「個に応じた支援を可能にする多様な学習支援オプションの充実」、「校内組織の連携による学校全体のユニバーサル化」の3点を挙げたい(図1)。



図1 支援体制の整備

## 2 研究の目的

学校生活の多くの時間を通常の学級で過ごす発達障害の子どもたちに有効な教育的支援を行うためには、配慮・支援の実践の場である通常の学級が落ち着いた状態になければならない。そこで、担任が円滑な学級経営をするためのポイントを示した「通常学級担任用チェックリスト」によるアンケートを実施し、その結果と実習校での支援経験、在籍校での取組を合わせて、学級担任支援の方向性と校内支援体制のあり方を検討する。

## 3 研究内容

### (1) 通常学級担任用チェックリスト

個のニーズに応じた支援を可能にし、一人ひとりが大切にされる学級づくりのために、特別支援教育の視点から学級経営のポイントとなる項目を整理し、「通常学級担任用チェックリスト」を作成した。これは、通常学級担任の先生方が、自分自身の学級経営を特別支援の視点から振り返ることができ、具体的実践の参考にしてもらうことにより、よりよい学級経営につながることを目的としている。チェックリストは、「教室環境と学習環境の整備」、「学習や行動のルールの明示」、「授業の工夫」、「一人ひとりを大切にする学級づくり」の4領域で構成し、全47項目である。(資料1参照)

このチェックリストをもとに3小学校でアンケートを実施してもらい、小学校での実践状況を把

握した。アンケートは、松山市内A小学校、南国市内B小学校、香南市内C小学校で実施してもらい、通常学級担任の先生方 69 名から回答をいただいた。また、通常学級担任外の先生方 27 名からも可能な範囲で回答をいただき、参考にさせていただいた。アンケートの結果の分析は、項目別のチェック率を全回答者と低学年・中学年・高学年で分けて行った。

① 「教室環境と学習環境の整備」について (図 2)

よくチェックされている項目は、「3. 子どものロッカーや机の中を整理しやすいように、仕切りや整理かご等を活用している」「7. 連絡プリント類は配布時に連絡袋 (ファイル) に入れるように習慣付けている」「12. 学習しやすい座席配置やグループづくりをしている」などで、80%以上のチェック率である。3 と 7 に関しては、低学年から学校全体で取り組んでおり、学校全体で統一されている。12 は、学習活動や班活動などを効果的に行うために伝統的に創意工夫されてきたことである。

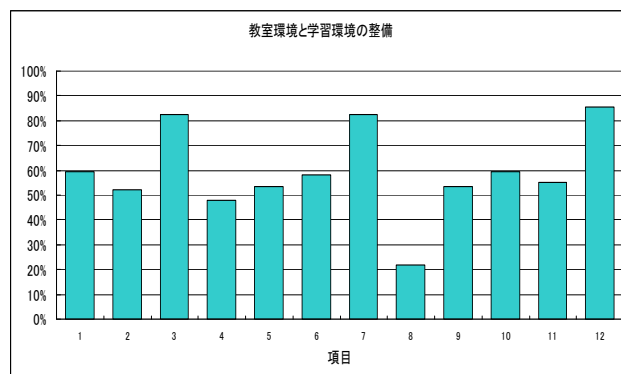


図 2 教室環境と学習環境の整備

一方、チェック率が低い項目は、「8. 黒板の周りには、掲示物を貼らずに学習に集中できるようにしている」の 22% である。そこには、教室を明るく楽しい場所にしたいという担任の願いも込められているが、刺激の量や不要な刺激の除去という点からは、再考の必要もあるだろう。「4. 机の周りに (できるだけ) 物をかけないようにし、活動しやすくしている」も、ややチェック率が低い。これには、教室にロッカーの数が少ないことが要因として挙げられる。教室設備の改善も必要だが、とりあえずは、かごや箱を用意して整理する方法も考えられる。

また、「2. みんなで使うものの置き場所を決め、分かりやすく目印を付けている」は、低学年 72%、中学年 47%、高学年 29% と、低い学年ほど配慮されていることが分かった。

② 「学習や行動のルールの明示」について (図 3)

項目 2 を除く 8 項目が 80% 以上チェックされており、大きなばらつきはなく、先生方が学級経営の中で大切にしている領域であることがよく分かる。「2. 時間の決まりは最優先に守るようにしている」は 67% とやや低いが、大切にしていないわけではなく、係や委員会の仕事など、責任を果たすことに重きを置いている場合もある。ただ、子どもの特性によっては、時間とおりに進まないことにストレスを感じる場合もあるので、その点への配慮も必要であろう。

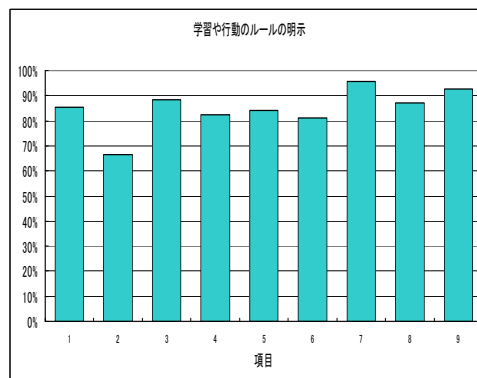


図 3 教学習や行動のルールの明示

「1. 見通しをもって生活できるように、朝の会で 1 日の流れを確認している」は、全体としては 86% と高い結果が出ているが、低学年 90%、中学年 63%、高学年 100% と特徴的な結果が出ている。高学年は行事や全校的な活動も多いので、朝の会での確認は欠かせないものと思われる。

③ 「授業の工夫」について (図 4)

「5. チョークの色やマーク等で大切なところを強調するようにしている」「6. 板書を写す時間をとっている」「9. 課題が早く終わった子どもには、次の課題を提示している」は、90% 以上であり、視覚的な工夫や作業時間・作業量について配慮していることがよく分かる。また、「10. 友だち同士教え合う場を設定している」「12. 机間指導時、子どもの間違いはそっと指摘してヒントを出すようにしている」も 80% 以上であり、友だち同士のつながりや個を大切にしている様子が伝わっ

てくる。10からは、お互いの得意・不得意を知り、互いの意思やペースを尊重する学級集団が育っていることが読み取れる。そして、12の「個別的对応」が生きてくるのだと考える。

「8. 難易度が違う活動内容や課題を用意し、子どもが選択できるようにしている」と「11. 分からないときのサインの出し方を決めている」が、それぞれ17%、7%と非常にチェック率が低かった。8については、実践したい気持ちはあるが、教材やワークシートづくりの時間が足りないことも悩みとして挙げられている。学年会や教科部会などで時間を設定して取り組む方法も考えられる。また、11については、あえてサインを使わなくても、担任が子どもの学習状況を把握できているからだと思われるが、子どもが自分の状態を主体的に発信できるという点で、一人一人を大切にする授業づくりにおいて、その必要性や活用を考えるべきではないだろうか。

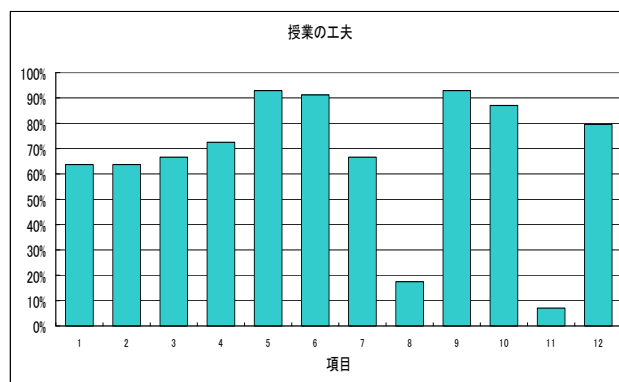


図4 授業の工夫

「4. 板書の量を考え、写すことが負担にならないように気を付けている」は、低学年86%、中学年79%、高学年48%と、学年によってかなり大きな違いがある。この点については、特に書くことに課題を抱えている児童には負担になる場合があるので、個の特性に応じた配慮も必要である。例えば、印を付けて書く範囲を示したり、あらかじめ板書計画をプリントしておいたりすることなども手立てとして考えられる。「3. 見やすいノートの書き方を指導している」は、低学年で86%であり、低学年の段階でしっかり定着させ高学年に向けて支援を減らしていく傾向が見られる。「1. 授業の開始時に、子どもの机の上に必要なものだけが出ているかチェックしている」も同様で、低学年では76%で高学年では低くなっている。このように、学習に向かう構えを定着させるのも低学年の段階で重要なことだと考える。

④ 「一人ひとりを大切にする学級づくり」について (図5)

この領域では、50~70%チェックされているものが7項目と多かった。

「6. 活動の途中で指示を出すときは、活動を止めてから話すようにしている」は、90%チェックされており、学年間の差もなかった。「5. 大切なことは、キーワードを繰り返したり板書やカード等で視覚的に提示している」も比較的良好にチェックされており、4や3にも心がけながら、きちんと指示が伝わるように配慮していることが分かる。

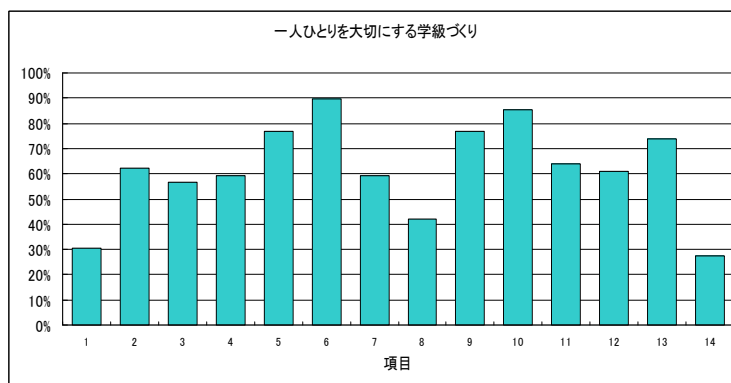


図5 一人ひとりを大切にする学級づくり

「10. 子どもの発言は正解でなくても大切にしている」も86%で、「9. 結果より努力したことを具体的に評価するようにしている」もよく実践されている。子ども一人一人の思考の過程や頑張りなどを評価することにより、自信と自己肯定感をはぐくむ配慮がされていることがよく分かる。また、「13. 不適切な行動に対しては、注意だけでなく適切な行動を示すようにしている」の74%も、先生方が毅然とした姿勢で適切な指導をされていることの現れである。このように子どもに理解しやすい教師の姿が、子どもとの間に信頼関係を築き秩序ある学級づくりのベースになることも忘れてはならない。

「1. 朝、子どもより早く教室に入るようにしている」は30%、「8. 子どもの特性を踏まえた役

割分担をしている」は42%とやや低いチェック率だった。8については、多くの役割を経験することも大切にしたいとの思いが先生方にあるからだと思われるが、子どもによっては、「Aさんのおかげで助かるな」と友だちからも認めてもらえ、学級にも貢献できるような意図的な役割分担をすることも効果的である。また、「14. 気になる子どもの記録を継続的にとっている」も24%と低い。子どもの様子を日々記録することは、継続が難しいことではあるが、個に応じた支援のためには必要なことである。そこで、座席表や名簿の一覧にチェックしていくなど、簡単にできる記録方法を工夫してはどうだろうか。

#### ⑤ 先生方の声より

今回のアンケートでは、先生方が日頃実践していることや感想なども記述していただいた。多数の声の中から、その一部を紹介する。

- ・ 学習のスタートの約束事を全員に確認してから始める。
- ・ 机の上にめあてを書いて忘れないようにする。
- ・ 日常生活の基本的なことができにくい子には、チェックカードを使って、毎日、1日の振り返りをするようにしている。
- ・ 計画帳を通じて各家庭との連携を密にし、一人一人異なるかかわりが持てるようにしている。
- ・ 「正義が通るクラスをつくる」ことを子どもたちにも浸透させ、子どもたちの行動を見て、一つ一つ何が（どういう行動が）正義なのかを伝えている。
- ・ 子どもたちに指示したことに対して必ず見とどけをし、できたら称揚し、できていなかったらやり通させる。どんな些細なことでも徹底して行う。
- ・ 支援に当たっても、高学年という段階を考え、その子のプライドが傷付かないような仕方での支援方法を大切にしている。（方法と場の設定が大事）
- ・ 専科教員の場合、学級によって取組が違うので、非常に困ることがある。専科教員のやり方で通すのか、自分がそれぞれの学級担任のやり方に合わせるのか、いつも悩んでしまい、どっちつかずの状態になっている。
- ・ 自分自身が、個に応じた支援ができていくかということを確認するよい機会になった。項目に当てはまるようなことを日頃から気を付けていきたい。
- ・ 子どもたちを注意する前に環境を整えていかなければ（注意する材料を教師サイドが増やしてはいけない）と思った。

#### ⑥ まとめ

アンケートから見えてきた学級経営上の課題として、次の3点が挙げられる。

ア 教室環境の整備については、教室の構造上の問題もあること

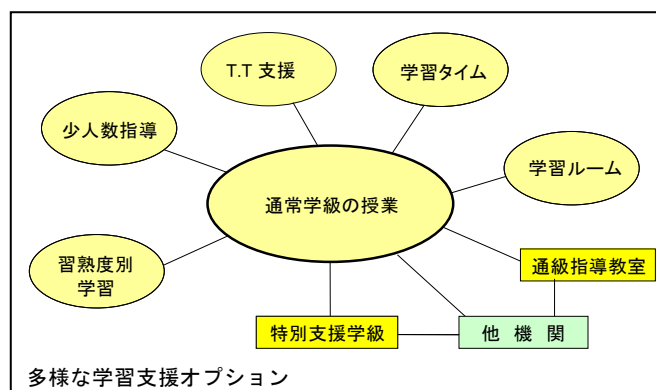
イ 教材つくりのための時間の確保が難しいこと

ウ 学年団を中心に専科の先生方も含めた協働的な取組が必要なこと

アは、施設・設備にかかわることなので、すぐに改善することは難しいが、小さな工夫の集積が生活しやすい教室づくりにつながるものと思われる。また、イとウに関しては、目的に応じた作業チームを組んで夏休み等に集中して行うことや、日常的に何でも話せる教師集団づくりができるかがKeyとなってくるのではないだろうか。

#### (2) 実地研修校での支援

通常の学級での配慮と支援だけでは、十分にニーズが満たされない子どもたちへの学習支援方法については、各学校の実態に



応じて多様な形態が工夫されている（図6）。

筆者は、毎週火曜日、松山市内のA小学校に支援に入らせてもらい、通常学級在籍の5年生の児童（B児）を担当した。個別の指導計画にもとづいて、担任・コーディネーターとともに支援方法について検討し、保護者の了解のもと、学級でのT.T支援と1時間の個別指導を行ってきた（図7）。

図6 多様な学習支援オプション（花熊、2005 改変）

① 個別指導の例1 **線なぞり**

B児の文字は、字形が整わず乱雑に書いているように見える。書くことには抵抗を示さないB児であるが、観察していると、手元を見ずに書いていることが多かった。そこで、フロスティッグの線なぞりを取り入れ、継続してきた（図8）。

この学習では、短期間に成果が現れた。

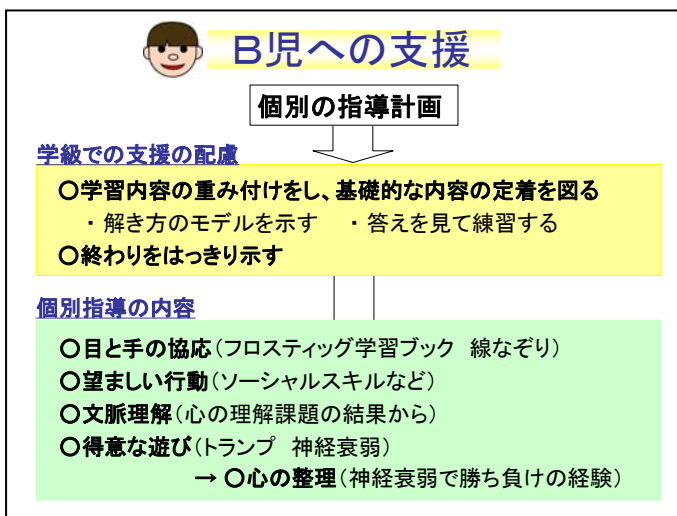


図7 B児への支援内容

手立てとしては、「どこがうまく描けているか」、「どこが難しいか」を自己フィードバックすることや、「角で止まること」をあらかじめ示すことに重点を置いた。

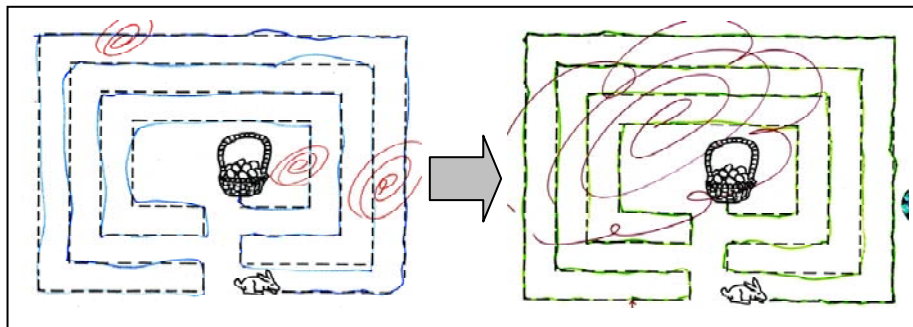


図8 線なぞり

このことから、B児には「気づき」を促

す手立てをし、「自己調整力」を発揮できるように支援することが有効だと考えられる。

② 個別指導の例2 **ソーシャルスキルトレーニング**

B児は、友だちとのかかわりを好み、集団の中での育ちが期待できる子どもであるが、トラブルも多い。そこで、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れた。次の例は、実際に起きた出来事を教材にしたものである（図9）。

Bさんは、昼休みにドッジボールをするために運動場に出ました。途中の鉄棒のところで、2年生の男の子の足を踏んでしまいました。男の子は、「痛い、やめて！」と言って泣いています。でも、Bさんはそのまま走って行ってしまいました。



図9 SSTワークシート

B児は、個別指導で学習したことをよく覚えているので、その学習内容を日常の生活の中にフィードバックすること

もできた。

③ まとめ

T.T 支援や個別指導により、B児は「安心感」や「満足感」、「自信」を得ることができ、学級での生活の安定にもつながった（図 10）。このように、個のニーズに

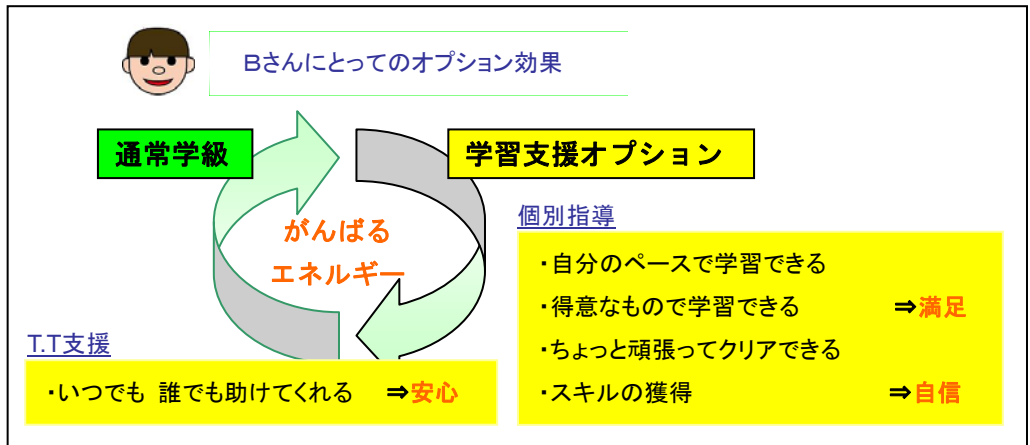


図 10 学習支援オプションと通常の学級とのつながり

応じた学習支援オプションは、学級経営と連動させながら活用したときに有効に働くものと考えられる。

(3) 在籍校における支援体制の試案

(1)、(2)で「学級経営」や「学習支援オプション」について述べてきたが、これらが有効に働くためには、学校全体が子どもたちにとって「分かりやすい、生活しやすい場所」になることが必要だと思われる。そこで、筆者の在籍校の研究推進体制を例に、ユニバーサルな学校環境を整えるための校内組織の連携について考えてみた。

在籍校では、「研究部」、「人権教育部」、「特別活動部」、「生活指導部」の4体制で研究を推進している。そこで、それぞれの部の活動の中に、特別支援教育の視点を取り入れることにより、学校全体のユニバーサル化が進むのではないかと考えた（図 11）。

例えば、研究部では、「見やすいノートの書き方」や「授業中の発言の仕方」など、授業を進めていく上で基本となる

内容を提案する。人権教育部では人間関係を円滑にする言葉づかいの指導、特別活動部では誰でも参加できるイベントの計画、生活指導部では掃除の手順を視覚的に示すビデオやイラストなどを作って提示するなど、これまでの活動の中に特別支援教育の視点を取り入れ、各部の研究テーマとリンクさせることを考えている。

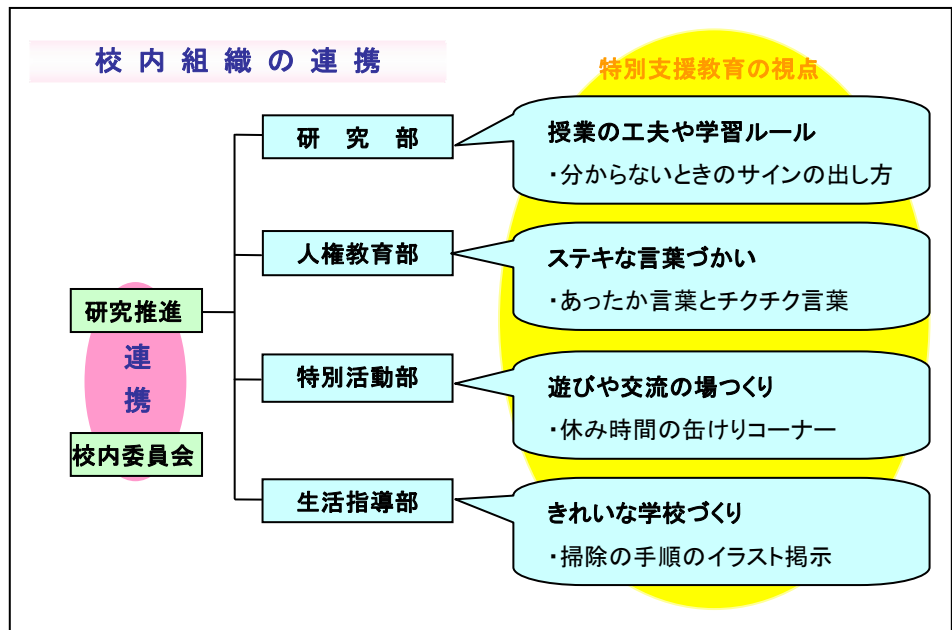


図 11 校内組織の連携による支援体制の試案

#### 4 総合考察

本研究で行ったアンケートの回収に伺ったとき、ある先生から「これは、『特別支援教育』と付けなくても、日頃から大切にしなければいけないことですよね。」と声をかけられた。確かにそのとおりである。落ち着いた学級には、これらの項目に関する仕掛けがたくさん散りばめられている。それらを先生方が共有し実践していくことで、特別支援教育の基盤ができるのである。

また、「学級担任用チェックリスト」に挙げた項目が、教師の自己フィードバックだけでなく、学校づくりのベースとなることもよく分かった。本研究では、3(3)で「校内組織の連携」を取り上げたが、研修部だけでなく、学校内の各部・各チームにも特別支援教育の視点は当てはまるものである。個に応じた支援の要とされている「個別の指導計画」も、こうした学校・学級の受け皿があってこそ有効に働くといえる。これまで、「個別の指導計画」を作っても機能しないという例をよく耳にしたが、作成方法や支援方法だけでなく、支援環境が整っていなかったことも大きな要因ではなかっただろうか。本研究の3(2)で紹介したB児への個に応じた支援も、友だちの「学び方の違い」を認め合う学級の雰囲気があったからこそ実現できたと感じている。

今後の課題としては、①ユニバーサルな観点に基づく学級の授業づくり、②個に応じた学習支援の工夫・充実、③特別支援学級担任の力の活用の3点が挙げられる。①のユニバーサルな観点に基づく授業づくりとは、発達障害のある子どもたちだけでなく、学級の子どもたち全員に役立つ「あると便利な支援」のことであり、授業のベースとなる教室・学習環境の整備、学習の内容や進め方を分かりやすく示す工夫、子ども同士がモデルになり互いに学び合えるような学級づくりなどが含まれる。②は、「学習支援オプション」の例にも挙げたが、「学習タイム」や「習熟度別学習」のような、一斉授業と個人指導の間にあるパーソナルな学習形態の工夫である。これは、これまでの「学力向上」のための取組を特別支援教育の観点から捉えなおすことにより、更なる充実が図れるものと思われる。③については、子どもを観る目や子どもへの接し方、スモールステップでの指導のノウハウなど、特別支援学級の担任の力を学校全体に還元することができるような校内体制を考えていかななくてはならない。

#### 5 おわりに

この1年間、研究を進めながら常に自分自身を振り返ってきた。そして、教師自身が子どもたちにとってよりよい「人的環境(モデル)」にならなくてはならないと痛感した。そのために、私も子どもたちに負けないように、「学び合い・支え合い・育ち合う」姿勢を大切にしていきたいと思う。

<謝辞>調査に協力くださった松山市のA小学校ならびに香南市のC小学校、在籍校の先生方、そして様々な面でお力添えをいただいた方々に厚く御礼申し上げます。また、研究全般にわたりご指導いただいた愛媛大学教育学部 花熊暁教授に深謝の意を申し上げます。

#### <参考文献>

- 1) 北九州教育委員会(2005) 小・中学校における通常の学級担任のための指導のアイデア:特別な支援が必要な子どもへの指導・支援の工夫.
- 2) 佐藤暁(2004) 発達障害のある子の困り感に寄り添う支援、学習研究社.
- 3) 竹田契一・大石敬子・花熊暁編(2007) S.E.N.S 養成セミナー特別支援教育の理論と実践、金剛出版.
- 4) 中央教育審議会(2005) 特別支援教育を推進するための制度のあり方について(答申).
- 5) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2007) 学校コンサルテーションを進めるためのガイドブック、ジーアス教育新社.
- 6) 日本発達障害福祉連盟(2007) 発達障害白書、日本文化科学社.
- 7) 花熊暁(2005) 特別支援教育の体制作りを目指して①. 日本LD学会会報、52.
- 8) 文部科学省(2007) 特別支援教育の推進について(通知).
- 9) 吉田昌義・川村久・吉川光子・柘植雅義編著(2003) 通常学級におけるLD・ADHD・高機能自閉症の指導:つまずきのある子への学習支援と学級経営、東洋館出版社.

## 一人ひとりに応じた支援を可能にする 学級づくりのポイント

個のニーズに応じた支援を可能にし、一人ひとりが大切にされる学級づくりのために、特別支援教育の視点から学級経営のポイントとなる項目を挙げてみました。実践されている項目に 印をつけてみてください。

\* 担当学年に 印をつけてください

・学級担任（1年生・2年生・3年生・4年生・5年生・6年生） ・学級担任以外

### 1 教室環境と学習環境の整備

	チェック欄
教室を整理整頓し、不必要なものを置かないようにしている	
みんなで使う物の置き場所を決め、分かりやすく目印を付けている	
子どものロッカーや机の中を整理をしやすいように、仕切りや整理かご等を活用している	
机の横に（できるだけ）物をかけないようにし、活動しやすくしている	
下校前に、全員で机の中や棚の整理整頓をするように習慣付けている	
学習プリント類は、配布時に整理（ノートに貼る・ファイルする）できるようにしている	
連絡プリント類は、配布時に連絡袋（ファイル）に入れるように習慣付けている	
黒板の周りには、掲示物を貼らずに学習に集中できるようにしている	
月・週・1日の予定を掲示し、見通しをもって生活できるようにしている	
学習で使用する用具や教材などは、1週間以上の余裕を持って知らせている	
忘れ物をした児童に、貸し出しができる用具類を用意している	
学習しやすい座席配置やグループづくりをしている	

### 2 学習や行動のルールの明示

	チェック欄
見通しをもって生活できるように、朝の会で1日の流れを確認している	
時間の決まりは最優先に守るように指導している	
学習中の正しい姿勢を指導している	
授業中の発言の仕方など、話し方のルールを指導している	
場に応じたことば遣いを指導している	
人の話を聞くときは、体を向け、最後まで聞くように指導している	
「分からない」と言えることや間違えることの大切さを教えている	
当番や係、委員会などの仕事を、最後までやり遂げるよう指導している	
不適切な行動には、一貫した態度や行動をとるようにしている	

## 資料1 - (2)

## 3 授業の工夫

チェック欄

授業の開始時に、子どもの机の上に必要な物だけが出ているかチェックしている	
学習のめあてや授業の流れをはじめに示し、見通しをもって活動できるようにしている	
見やすいノートの書き方を指導している	
板書の量を考え、写すことが負担にならないように気を付けている	
チョークの色やマーク等で大切なところを強調するようにしている	
板書を写す時間をとっている	
「静」と「動」の活動を組み合わせて、授業にメリハリをつけるようにしている	
難易度が違う活動内容や課題を用意し、子どもが選択できるようにしている	
課題が早く終わった子どもには、次の課題を提示している	
友だち同士教え合う場を設定している	
分からないときのサインの出し方を決めている	
机間指導時、子どもの間違いはそっと指摘してヒントを出すようにしている	

## 4 一人ひとりを大切にする学級づくり

チェック欄

朝、子どもよりも早く教室に入るようにしている	
きれいな言葉遣いや肯定的な表現をするように心がけている	
指示は短く、一つの話で一つの内容を伝えるようにしている	
話の見通しがもてるように、あらかじめ要点を挙げて話すようにしている	
大切なことは、キーワードを繰り返したり、板書やカード等で視覚的に提示している	
活動の途中で指示を出すときは、活動を止めてから話すようにしている	
子どもが好きなことや得意なことを、授業や学級経営に取り入れている	
子どもの特性を踏まえた役割の分担をしている	
結果より、努力したことを具体的に評価するようにしている	
子どもの発言は、正解でなくても大切にしている	
順番に当てるときには、「パス」も認めるようにしている	
自尊心を傷付けるような叱り方はしないようにしている	
不適切な行動に対しては、注意だけでなく適切な行動を示すようにしている	
気になる子どもの記録を継続的にとっている	